

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13017

研究課題名（和文）日本陶磁における金銀彩の特殊性について

研究課題名（英文）The Particularity of Overglaze Gold and Silver Use in Japanese Ceramics

研究代表者

三笠 景子（Mikasa, Keiko）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・主任研究員

研究者番号：80450641

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：第一の成果として、17世紀後葉の仁清が手がけた金銀彩作品、17世紀後葉の有田の色絵磁器を契機として、金銀彩が施された日本陶磁の作品を網羅的に調査することができた。第二に、新型コロナウイルス蔓延による活動制限のなかで、「金銀彩を施した陶磁器」以外にも視点を広げ、安土桃山時代～江戸時代初期に制作された障屏画、漆工、金工作品を対象とすることができた。第三に、当初想定していなかったイスラム陶器の事象としてラスター彩の調査を行なうことができた。そして、金銀彩の賦彩方法について、薩摩焼、京焼などの現代作家に取材し、現代の視点から仁清や乾山作品における金銀彩について聞き取りを行なうことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本陶磁研究は、生産地や作者、時代という枠のなかで語られることが多かった。それらを横断しつつ「金銀彩」という装飾技法に焦点を当て、個々に分析を試みることはほとんどなかった。そうしたなか、中国陶磁研究に携わってきた研究代表者独自の視点で、同時代の文化事象や世界の製陶との比較から、日本陶磁の特殊性についてとりあげた点に意義があると考えられる。また、日本陶磁における金銀彩の特殊性を明らかにすることは、日本独特の美意識の特質について解明する手がかりを得ることであり、この点において美術史学に新しい視点を加えるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project focuses on the art-historical significance of Japanese ceramics in overglaze gold and silver. First, I made a research on main pieces of Kyoto ware and Imari ware in 17th-19th centuries. Second, I expanded the scope of my survey about panel and wall paintings, lacquerware, and metalware produced from Azuchi-Momoyama to early Edo periods. Finally, I was also able to interview contemporary artists such as Satsuma ware and Kyoto ware about the method of coloring gold and silver, and to hear about the works of Ninsei and Kenzan from present day perspective.

研究分野：東洋工芸史、中国陶磁史

キーワード：金銀彩 仁清 乾山 有田 ラスター彩

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

1) 申請者は、陶磁器を担当する研究員として平成29年度春季特別展「茶の湯」(東京国立博物館)を担当し、京焼の陶工 野々村仁清(生没年未詳)作と伝わるいくつかの茶湯道具の作品を実見する機会を得た。そこで色絵を大成したと評される仁清の作品には金銀彩が多用されていること、とりわけ変色しやすい銀を用いることに疑問を持った。中国陶磁の展開にはあまりみられないものだからである。これを契機として、平成29年度(2017)鹿島美術財団助成研究において、「日本陶磁における銀彩の美術史的意義」に関する調査研究を行なった。

まず、硬質磁器の生産を確立し、世界の製陶を牽引した中国陶磁にみられる金銀彩の作例を、およそ唐時代から清時代に至るまで時代を追って整理し、東京国立博物館の収蔵品を中心に調査した。その結果、中国陶磁の場合、装飾部分において金彩が占める量に幅はみられるものの、金彩は副次的に用いられる場合はあっても、基本的に主文様となることはない。また、硫化(空气中の硫化水素、亜硫酸ガスに反応すること)によって黒く変色してしまう性質を持つ銀を装飾に用いることは、宋時代のごく一時期に定窯(河北省)でみられるほかに、ほとんどないことがわかった。

次に、17世紀後葉に京焼において初めて色絵を大成したといわれる仁清の作品のなかから、銀彩を用いた作品に焦点を当てた。東京国立博物館の収蔵品のほか、出光美術館、根津美術館、MOA美術館、石川県立美術館、京都国立博物館、北村美術館などの所蔵品を調査した。

さらに、仁清と同時期に相当する17世紀後葉の有田焼にみられる銀彩の作例について、佐賀県立九州陶磁文化館、田中丸コレクションが所蔵する作品の調査を行なった。

その結果、17世紀後葉、ほぼ同時期に出現する仁清と有田焼には、中国陶磁におけるの展開とは異なり、金銀彩を積極的に取り入れる、とくに銀を積極的に用いる傾向が明らかになった。

2．研究の目的

本研究「日本陶磁における金銀彩の特殊性について」では、これまで銀彩のみに焦点をしばって調査研究を試みた「日本陶磁における銀彩の美術史的意義」(鹿島美術財団助成研究)の成果を礎に、あらためて金彩を含めた「金銀彩」に関する総合的な研究として進展させるべく、下記の3点を目的に掲げた。

- (1) 日本陶磁における金銀彩の作例を、より網羅的に把握する。
- (2) 金銀彩の賦彩方法の違いを作例ごとに整理し、その視覚的效果を分析する。
- (3) (2)によって得られた諸相を美術史的に考察する。

ただし、本研究は、将来において個々の作品が同一条件のもとに正確な解析がなされることを想定しつつ、現時点では蛍光X線分析などの科学分析の手法はとらず、あくまで実見による作品調査、および時代考証や作品論に基づいた美術史的考察を目指すものとした。

3．研究の方法

- (1) 鹿島美術財団助成研究でおよばなかった未調査の仁清、それにつづく乾山をはじめとする

京焼、および17世紀後葉から18世紀に位置づけられる輸出向けの有田焼の金銀彩の作品・出土資料の調査を進めた。

【主要調査先】京都市埋蔵文化財センター、京都国立博物館、根津美術館、サントリー美術館

(2) 令和2年度(2020) つづく3年度(2021)は、新型コロナウイルス蔓延により当初想定していた網羅的な作品調査は大きく制限された。ただし、東京国立博物館で開催された(または開催予定であったが中止となった)展覧会の準備にあたり、それぞれのテーマで金銀彩について考察、作品調査を行なったことが当該年度の本研究の主な軸となった。具体的な研究の方法として、まず前年度に金銀彩研究の手掛かりとして獲得した漆工や金工、絵画作品への関心、および金銀彩に対して対照的に使用される黒(黒釉、黒の上絵具)への関心に基づき、16世紀後半の茶の美術、「桃山美術」、それに続く「南蛮美術」、17世紀以降開花する「琉球美術」に対象を広げて、時代背景の考察とできるかぎりの調査を行なった。

【主要調査先】樂美術館、京都国立博物館、神戸市立博物館、沖縄県立美術館・博物館、沖縄県立埋蔵文化財センター、大阪市立東洋陶磁美術館、久米島博物館

(3) 日本陶磁の展開において、幕末から明治期にかけて、とくに海外輸出向けに製作された陶磁器に金彩が多用される傾向がみられることから、当該時期に制作された薩摩焼、九谷焼、京焼の金彩(ごく一部銀彩も併用される)の作例へと調査対象を広げた。また、東京藝術大学、日本伝統工芸士会、薩摩焼の作家への聞き取りを行ない、現代の作家の視点からの金銀彩の賦彩法に関する教示を得た。さらに、当該年度に東京国立博物館に新たに収蔵されたイスラーム陶器の色絵にみられるラスター彩(酸化銀や酸化銅を含んだ顔料で絵付けをするもので、金属的な光沢が特徴の上絵技法)に注目し、イスラーム美術の研究者である神田惟氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)を招聘し、国内有数のイスラーム陶器コレクションを有する所蔵先の作品調査を行なった。

【主要調査先】鹿児島県歴史・美術センター黎明館、石洞美術館、愛知県立陶磁美術館

4. 研究成果

(1) 第一の成果として、本研究の契機となった17世紀後葉の仁清が手がけたとされる金銀彩作品、17世紀後葉の有田の色絵磁器のうち、金銀彩が施された作品を網羅的に調査することができたことが挙げられる。加えて、18世紀の京焼を代表する乾山の作品のうち、金銀彩を象徴的に施した重要文化財「白泥染付金彩薄文蓋物」(サントリー美術館)、重要文化財「銹絵染付金銀白彩松波文蓋物」(出光美術館)の調査や、18世紀の輸出伊万里における金彩(金襴手)の作品調査を行なうことができた。

(2) 第二の成果として、新型コロナウイルス蔓延による活動制限のなかで、研究対象を「金銀彩を施した陶磁器」以外にも広げることができたことが挙げられる。具体的には、16世紀後半の日本における革新的な文化的事象としてとりあげられる茶の湯で賞玩された曜変や油滴、灰被などの唐物天目、また「桃山美術」のうち、金で盛り上げるように立体的、工芸的に雲の表現をとる障屏画、金や銀、銅などの金属により直接的にアプローチした漆工品や刀装具などをみた。同様に、金属の輝きを効果的に表現した高台寺蒔絵、南蛮漆器、琉球漆器の類をみる機会にも恵まれた。こうしたなかで、金や銀が装飾に多用されるようになる一方でそれと対照的に登場する、もしくはその金属的なつや、輝きに対する関心とは異なるものの、時代背景と合わせて関連する

アプローチと考えられる16世紀末の楽茶碗について関心を持ち、初代長次郎、二代常慶、三代道入の作品、および本阿弥光悦の作品の調査を行なうことができた。

(3) 第三の成果として、イスラーム陶器の調査が挙げられる。陶磁器の装飾としての金銀彩は中国でも宋時代、11世紀頃に定窯でみられたが、それらの場合、有機物による接着剤で賦彩したものであるため焼き付けていないため、剥落しやすいという難点がみられた(今井敦「白磁金彩雲鶴唐草文碗といわゆる金花の定碗について」『MUSEUM』第484号、1991年)。また銀彩の場合は冒頭に述べたとおり、硫化により黒く変色してしまう。この定窯にみられた金銀彩は一時期で終焉したが、イスラームでは酸化銀や酸化銅を呈色剤に用いた顔料で絵付けをして焼き付け、焼成後に磨きをかけることで、金属的な光沢を放つ装飾を施すことに成功する。このラスター彩は焼き付けているため、定窯の金銀彩のように剥落することはほとんどない。これに注目し、東京国立博物館所蔵品のほか、国内有数のイスラーム陶器コレクションを収蔵する石洞美術館、愛知県陶磁美術館所蔵品を調査した。調査にあたり、イスラーム美術の専門家である神田惟氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)に教示を得た。調査の成果として、東京国立博物館において特集「東京国立博物館のイスラーム陶器」(2022年10月4日~2023年1月22日、東洋館5室)を開催した。

(4) 第四の成果として、幕末~明治期の海外輸出向けの陶磁器にみられる金彩に注目し、とくに薩摩焼について深港恭子氏(鹿児島県歴史・美術センター黎明館)に教示を得た。また、金銀彩の賦彩方法について、薩摩焼、京焼などの現代作家に取材し、現代の視点から仁清や乾山作品における金銀彩について話を聞くことができた。

このように、当初の目標であった日本陶磁における金銀彩作品の網羅的調査は、分野を超えて、さらに地域を超えて広く行なうことができた。製作過程において高火度による「焼成」という段階を経なければならないこと、その焼成には大きなコストと時間がかかるということ、そして基本的に量産品であるということが製作の前提にある陶磁器に対して、金属的な輝きをもつ装飾を施すことは日本陶磁に先行する中国やイスラーム圏、それらの影響を受けたヨーロッパの製陶にも見いだすことができたが、きわめて限られた事象であったことがわかった。

その一方で、日本では、有田や京都において製陶が本格的に行なわれるようになった17世紀後葉より、低火度焼成の陶器、高火度焼成の硬質磁器いずれにも、積極的にさまざまな工夫を凝らして金銀彩を採用してきた。その表現方法は一様ではなく、均一であったり、盛り上げたり、光沢を出したり、または光沢をなくしたり、擦れさせたりと多様であり、描くモチーフに依って変えるだけでなく、胎土や焼成方法に依って表現を違えなければならない必然的な工夫もたらしたものであることがわかった。

本研究の成果は2022年美術史学会東支部例会において「日本陶磁における金銀彩とその意義について」(オンライン)で発表した。しかし本研究では、網羅的調査の次段階として金銀彩を施す理由・背景の考察を深めるには至らなかった。今後はまず、17世紀後葉の有田と京都(仁清)において同時に金銀彩を採用した背景を探るため、美術史的な流れのなかに陶磁器の金銀彩を位置づけるべく同時代の他分野の事象を整理し、これを礎に日本陶磁における金銀彩の特殊性を通史的に説明できるよう文章化に努めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三笠景子
2. 発表標題 日本陶磁における金銀彩とその意義について
3. 学会等名 美術史学会東支部例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------